劇団1980
ICHIKYU-HACHIMARU

いちばん小さな町

言わせて！今日の芝居
五十字劇評 No.65

【六〇代】

▼私達の祖父母の時代にブラジルへといかれた方々、つい百年前の事なのに、なぜ今の社会は上から目線でいるのでしょうか。でも同じ日本人でも、少し自分と違うと、受け入れる事が大変な事があるのも事実です。ムズカシイ…ですね。（女性）

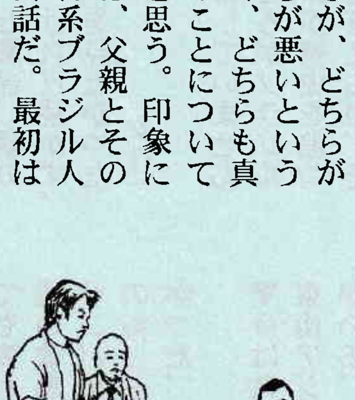
▼今時少数の外国人なら身近にいる事が多いが、多数となるとモメるのは自分達の慣習が不確かになる恐れなのだろう。文化や慣習が自分の中で確立していれば、もしくは見直す余地があれば、お互い少しはわかりあえるのではないだろうか。（男性）

▼外国人労働者の人権問題について考える処もあり、日本の人口減も混じえて、受け入れに寛容な社会を目指したいものです。（女性）

▼移民、家族、サンバ再興など、様々な難問が簡単に片付き過ぎの感。会議の丁々発止の議論は臨場感があって成程と思った。（男性）

▼日系ブラジル人が四千人もいる町で、町の人々との共生が可能なのかということが一つのテーマになっている。ばらばらだった家族の再生ということも一つのテーマだ。町興しは古くて新しいテーマだが、そのことについても考えさせられるところがある。サンバをメインテーマにした町興しについて、賛成派と反対派の対立があるが、どちらが良くてどちらが悪いということではなく、どちらも真剣に町興しのことについて考えていると思う。印象に残った場面は、父親とその娘の恋人の日系ブラジル人の青年との会話だ。最初は寡黙だった青年が自分の過去や思いを話し始めるところから、互いに少しずつ理解し合うようになっていくところだ。全てが良い方向で幕を閉じる舞台は、予定調和的なところはあるが、全体の印象としては良く出来ている作品だと思う。（男性）

▼あれだけ強力な反対の中、どうやって、サンバカーニバルに漕ぎ着けたのか。反



対陣がサンバを踊るほどの、逆転劇を見たかった。このモヤモヤ感は何だろう。寝不足が原因だろうか。（男性）

▼多様な立場の思い。町づくりと外国人労働者。国策や法律の急変。会議の場面が感動。『共生』は日本人の間にも。（女性）

【七〇代】

▼サンバ祭り開催賛成か反対かでもめていたが、新しいことを始めようとすると必ず賛成・反対が出てくるようだ。多数派に流されやすい私ですが、町に住んでいる皆のためと町おこしになるなら開催賛成派です。ブラジルの方に教えられたことは両親（家族）を大切にすること、日本人も以前はそうだったはずなのに。ブラジルに移民した初代日本人の教えが受け継がれているのでしょうか、それとも国民性でしょうか？（女性）

▼亀山家あるある家族です。そして世界は一つ！地球は一つ！仲良くなれるはずです。私にも何かできるはず！（女性）

▼幕あきの力強い集団演技に『おお！』と驚き、話の展開を期待。けれど続かず。もっとサンバを見たかった。（女性）

▼あまり期待していませんでした。ところがブラジルに関する政策が歴史を追ってしっかりとらえられ、それぞれ批判もあってきちんと作られているかなと思いました。ただ説明しすぎて、ひとりのセリフが長くつかれました。

▼移民という国策が生み出すもめ事の多さ。忖度して沈黙する日常を続ける訳にはいかない。折角の憲法も身につかない。（女性）

▼当時の入管法は企業の人手不足を補うため安価な労働力として外国人を受け入れた。その流れは今に至っても変わらず、共生とは程遠い改悪がまた行われた。サンバの町おこしでない別の視点で声をあげてほしかった。

▼今はスーパーや近所にも東南アジアからの出稼ぎ者がいる。人として仲良く接して交流したい。（女性）

▼私達が現実と向き合い考えなくてはいけない作品と深く考えさせられ、学ばさせて頂く作品だなと、良かった。

編集スタッフから

「今日の芝居どうだった？」「面白かったよ」「まぁまぁだね」『それで終わり？』これでは【もったいないおばけ】が出そうですね。あなたはどうでしたか？